

《随想》

重力と恩寵ふたたび

千石 英世 SENGOKU, Hideyo

「重力と恩寵」といえばシモーヌ・ヴェーユの書物のタイトルなのだが、このタイトルでこの書が著者生前に刊行をみたわけではない。遺されたノートブックから死後編纂されて公刊されたものだ。今日彼女の遺したノート類は「カイエ」として網羅的にまた系統的に全集ふうにつぎつぎ刊行されているとのもので、この書はそれらに包含されるものとなつていくかもしれない。だから現在では異本扱いになつていくものかもしれない。

そのへんの事情を正確にフォローできていない自分を恥じなくてはならないところだが、いまはそんな怠惰な事情はひとまず措いてさきにすすむことにすれば、その書にこんな一節が見える。記憶から引用するので細部がちがつているかもしれない。

「この宇宙に充滿するのは重力と光である」。

光が「恩寵」であるが、むしろキリスト教旧教のいう恩寵である。だからパスカルの恩寵ということになる。シモーヌはユダヤ教の家に生

まれたのだが、思想的にはキリスト教へのぎりぎりの接近があつた。にもかかわらずついに宗旨替えすることはなかつた。「カイエ」の一部は、カトリック神父との信仰をめぐる往復書簡のなかで書きとめられたものである。

アフロリズム的な瞑想録ともいうべき「重力と恩寵」であるが、そのなかの一節、右の一行は、さまざまな連想と跳躍を呼んで深い示唆に富む。

ここ数年、私は斎藤義重の遺したノート類の編纂にかかわつてきた。このたび『無十』というタイトルでなんとか書物化にこぎつけることができた。水声社なる書肆が版元となった。

斎藤義重？ フウウ？ ということがあるかもしれないが、現代美術の巨匠である、とだけ注記してさきへすすみたい。一九〇四年生まれ二〇〇一年没。サイトウ・ヨシシゲともサイトウ・ギジユウとも呼称された。作風は抽象で、絵画と彫刻の中間地帯に造形思考をめぐらせた。目と精神、あるいはヴィジュアルとヴィジョンの連動については、メルロー・ポンティの難解な発言がある。難解だが、傾聴にあたいたい思考である

う。

二〇世紀抽象芸術は、メルロー・ポンティのいう意味で、目と精神の関係を、いや、それをはるかに越えて精神の可能態をヴィジュアルイズしようとした、斎藤義重の作品を鑑賞しつつ思うことはそのようなことなのだが、そこに重力と恩寵なるペア概念を導入すると、ことがらがいっそう精確に記述可能になると私は考えようとしている。

抽象芸術は二〇世紀初頭パリの立体派がその端緒を切ったところの、その、連続のなかにあるというのが定説である。そんな定説とは別に、立体派の作品は現物を見るとどれもなかなか渋くていいものである。悪くはないものである。だが、かれらは何をしたのか、あの画面のなかで、と考えるともともとと考えたくなる。西洋美術における一九世紀と二〇世紀の断絶のはげしさは何を語りかけてくるのだろう。何が起こったのか。

これについては定説めいたものがないではないのだが、十分とはいえないというのが私見だ。複数視点からの切り子画面の云々というのは現象を表面的にとらえているにすぎないのではないか。

そこで私見だが、私見によれば、あれは重力と反重力、重力と無重力、つまりは重力と恩寵の視覚化なのだ。少なくともその試みなのだ。

透視遠近法とキリスト教的視覚世界の連動は知られている。あの連動のなかに働いていた重力が途切れて立体派は誕生する。途切れて、天地左右奥と手前といった旧秩序が解体して、それを告知するのが立体派の試みとなる。抽象派はそんな立体派を純粋化したものである。斎藤義重の作品を鑑賞しているとそのように思いなされるのだ。

だが、キリスト教徒ならざるものにこうしたことは何の関係があるかということになるだろうか。ならば、宇宙ステーションの無重力世界に

カエルの受精卵を持っていくと卵割がどうなるかの問題は異教徒の関心事でもあるのではないかとはいえるだろう。卵割はするが不十分だというではないか。

立体派は影のグラデーションを追放した。徹底していないケースもあるが、基本追放したといえる。そしてすべてを面にした。浮世絵なみに面にしたわけだ。従来の重力観に異変が生じたのと同根のこととして光にも異変がおきたわけだ。光が影をうまなくなった。影が光をはらまなくなった。光は光、影は影となった。

さて、ここまで書いてきて、私はこうしたことを、長く書くことをするだろうか。今後それをしたいだろうか。美術批評は文芸批評に比して批評としての熟成度が低い、ジャンルとしての完成度が低い、というところを感ぜられるかもしれない。そんなことをいえば映画批評はどうなる、と。低いのは、それは君の美術論のことをいっているのでしょうか、となるのかも知れない。

批評の熟成度完成度とは何だろう。批評文が批評対象を逆産出するかどうか、逆胚胎するかどうか、のことではないだろうか。

立体派出現以降、抽象芸術出現以降、ヴィジュアル・アートは宇宙論を語る語彙を得たということだ。曼荼羅を指すということだ。

▽斎藤義重著・千石英世編『義十』（水声社、二〇一六）